

星 城 大 学

「 高 校 生 川 柳 」

講 評 集

星城大学「高校生川柳」講評集は、2015年から始まった本学が主催する高校生による川柳コンクールの入賞作品をまとめたものです。

毎回、非常に多くの作品が寄せられ、多くの高校生のみなさんが応募して下さいることに感謝しつつも、審査員一同どれを選とするか毎回の審査では悩ましいところでもあります。しかし、われわれには、高校生の気持ちに触れることができる貴重な機会でもあり、その意味でも大変有り難く考えております。

川柳は江戸時代の町人文化を起原とするものですが、近年はちょっとした川柳ブームになっている、との報道もありました。大人の川柳は自虐ネタで笑いを誘うものが多いのですが、今回の高校生の皆さんの作品では、若さと純粋さが光るものと、一方で作品としての高い技巧が感じられるものがあり、読み応えのあるものが多いように思われます。応募されたみなさんは、せっかく今回、川柳を詠む機会があったのですから、これからも川柳を通して知識だけではなく、知性と感性を磨き、そして心の余裕を大切にしていきたいと願っております。

ご応募下さった高校生の皆様およびご指導をいただいた先生方には、心より感謝申し上げます。



五世柄井川柳

「和らかでかたく持ちたし人ごころ」

岸姫松連 腥齋佃 (なまぐさいたづくり)

2015年第1回（2015年9月）

（大賞）

「通学路 春夏秋冬 喜怒哀楽」

井上やす香（東海商業高校）

講評

- ・ 思うこといっぱい詰まった通学路。
- ・ 簡単な四字熟語を使って、高校生活を見事に凝縮して表現、しかも読み手の共感を引き出し
ている。
- ・ 3年間の通学路、あっという間の高校生活を回顧する姿が思い浮かぶ。
- ・ 毎日毎日、喜怒哀楽様々な思いを通学鞆に詰めて、生徒達は登校してくるのです。それだけでも、奇跡的なのかもかもしれません。

（傑作賞）

「テスト前 気づけばなぜか 掃除中」

石黒希実（星城高校）

講評 思い出します。これは本当にそうです。

「プリントが 腕にピッタリ はなれない」

川節彩未（武豊高校）

講評 夏の情景。一生懸命な高校生の姿が描かれてていいです。こういうひたむきな純粹さ、いつまでも大切にして欲しいと思います。

「ギリシャ国 私の宿題 赤字危機」

下里杏実（東海商業高校）

講評 これは思わず笑いました。時事トピックを日常生活に取り入れるセンスがいいですね。

「茜色 校舎に溶けて またあした」

岡戸みさき（半田高校）

講評 これはきれいですね。情景まで浮かんできます。「茜(あかね) さす、紫野(むらさきの)行き、標野(しめの)行き、野守(のもり) は見ずや、君が袖(そで)振る」という額田王のうたを思い出すという審査員もいました。内容は違うのですが、とてもいい作品です。

「定時制 朗読中に 寝落ちする」

加古亜由美（横須賀高校）

講評 懸命さが伝わってきて、ほんとうに「がんばれ」って応援したくなりました。

「母にはね 素直に言えない ありがとう」

近藤安里（武豊高校）

講評 これは秀作。とくに「ね」がいいですね。この「ね」で作者のやさしさがつたわってきます。

「商品の 中身は人の 思いやり」

山口修平（武豊高校）

講評 これは2つの意味ですごい。ハードじゃなくて、ソフトだと言っている。つまり、経済のソフト化、サービス化、情報化の時代ということに対応している点。もうひとつは、そうであっても、経

済的価値のある情報だけが重要というのではなく、ひとの思いやりが重要といている点。是非、大人になっても、この気持ちを持ち続けて欲しいと思います。

「祖父母宅 話せる時間が 愛おしい」

田中琢巳（武豊高校）

講評 実は私にも老人の家族がいますが、まったく同じ気持ちです。そんな優しい気持ちをもったお孫さんがいる祖父母は幸せだと思います。

「走れメロス すぐ転ぶ」

土井勇人（星城高校）

講評 句としての定形を破った作品ですが、そのことが作品の味を出しています。どういう意味なのか、作者以外に具体的なことはわからないが、笑えるところがすごい。具体的なだれか個人を想定しているのかもしれないし、理想に燃えても現実でずっこけてしまう人間のドジさを詠んでいるのかもしれない。簡単ながらよくできた作品です。

「五時間め 船こぐ手元の みみず文字」

鈴木万理（半田高校）

講評 これは本当にその通りですね。だれでも経験があるのではないかと思います。気持ちだけは懸命で、何とかノートだけは取ろうとする、けどどうしても生理現象には勝てない、後からノートを見ても何を書いたのか、書こうとしていたのかわからない。思わず苦笑してしまいますね。

2015年第2回(2015年10月)

(大賞)

「全力で あなたの笑顔 守り抜く」

蓼原広美 (武豊高校)

講評 川柳というとユーモア、面白さがポイントになりますが、この句は大変まじめな内容です。それでも、この句が大賞となった理由は、やはり若者らしい、使命感にあふれる熱意が感じられるということです。

将来の進路、希望する職業を意識しての作品でしょうか。われわれとしても応援したいところです。

相手を思い、相手の立場に立つまっすぐな気持ちが伝わってくる、という評もありました。

(傑作賞)

「元気である 魔法の言葉 「ありがとう」

吉岡礼央 (星城高校)

講評 人の善意とか、親切に、素直にお礼が言える、そういう気持ちを大切にしたいと思

い選定致しました。知識とか事務処理能力だけではなく、こうした気持ちを持ち続けること

も目標にして欲しいと思いました。

「ありがとう 文句を言う母 涙ぐむ」

河野真穂 (武豊高校)

講評 私たちは家族というもの大切さや、有り難さをつい忘れてしまいます。とくに親子はそうかもしれません。親にしてみれば、親の気持ちがわかってない、ありがたみがわかっていない。子供は子

供で、私のことわかりもしないで、文句ばかり、などなどですね。家族といえども、お互いにありがとうがいえる関係であって欲しい、と思います。

「生きてると 感じるために 登校し」

加藤晃輝 (半田高校)

講評 これは自分の存在を友達、あるいは部活などを通じて確認するという意味でしょうか。

われわれはインターネットで何でも手軽に正解が得られる、フェースブックでクリックすれば友達ができる、そういう安直な発想に陥りがちな時代に生きていますが、大切なものはやはり自分で探す、この句を読んでそう思わせられました。

「明日やろう 思った時点で 負け組さ」

竹内亮介 (東浦高校)

講評 これは非常に実務的な内容です。仕事でも勉強でも同じです。英語のことわざに *A stitch in time saves nine* というのがありますが、これは期限内に1針縫っておけば、後から9針縫う羽目にならずに済む、という意味ですが、この期限、締切りということの重要性、期限を過ぎてしまえば、せつかくやっても意味がなくなる、ということのを心に留めておきたい、と思います。

「一歩出す 勇気をくれる 療法士」

市之瀬成寿 (星城高校)

講評 病気やケガをしてしまうと人間気弱になります。でも、病院にいてやさしくしてくれると嬉しくなった、力がわいてきた、そういう経験はある人も多いのではないのでしょうか。

やはり、自分一人だけではダメなんだな、他の人の思いやりが大切なんだな、ということに気づかされるとと思います。そんな思いを元気になっても忘れないで欲しいなと思います。

「現代文 眠りを誘う 言葉攻め」

谷内美優（東浦高校）

講評 この句が面白かったのは、（一生懸命教えられている先生からすれば失礼な話なのですが）眠りを誘うというところに加えて、言葉攻めという擬人法も効いています。高校生活の一コマが、ユーモアあふれる言葉でよく伝わってきました。

「夏休み 休む間もなく 学校へ」

青木美菜（東浦高校）

講評 3年生の方ですが、部活や登校日で忙しい夏休みだったのでしょうか。しかし、忙しい事は、暇でやることがない、よりずっといいことです。福沢諭吉も「世の中で一番さびしい事は、する仕事のない事です。」とっております。目標にむかって頑張って欲しいと思います。

「町おこし 商店街で ひと旗を」

高津玲奈（武豊高校）

講評 商店街のあるような地域もだんだん減ってきていますが、「ひと旗を」という無邪気な心と地元への愛着が伝わってくるいい作品です。地域というのは、その人は当たり前と想着いても、外から見たらすごく魅力のあるもの、であることがあります。そういうものを見つけ出して、町おこしをして欲しいなと思いました。

「お客さん ひとりひとりに おもてなし」

加藤朱音（星城高校）

講評 先日ニュースを見ていましたら、開店時に店員さんが並んでお出迎えしている、自分の国ではあり得ないと言って驚いている外国人観光客がいました。グローバル化が進むと、世界どこにいても同じような店、サービスばかりという状況になる、と言われていますが、こういう日本のサービスの良さは若い人に受け継いでいってほしいな、と思います。

「もうきたか つるべ落とし 学生服」

水野良祐（東浦高校）

講評 卒業が近いという事を言っているのでしょうか。つるべ落としは日が短くなる秋の季語でもあります、秋の日を高校時代になぞらえているのでしょうか。句としてのうまさ光る作品だと思います。

2015 年第 3 回 （2016 年 3 月）

（大賞）

「先生の 知識がつまった 子守歌」

渡邊実生（啓明学館高校）

講評 昼食後の午後の授業、ふと睡魔におそわれる、だれにでも、そういう経験があると思います。これは、そんな日常生活にひそむ、おかしさを詠みつつ、同時にまじめに受講しておれば有益な知識が得られたのに、というちょっとシリアスな反省と後悔の念をも読み込んだ、うまい作品です。

「世界一 おいしい店は いくつある」

山下理々（各務原高校）

講評 世界一はひとつだけのはず。それが、いくつもあるのは変ですね。でも、おかしいとわかっているけど、そう聞くと、われわれ消費者はどこかで期待してしまう。実は、これは売手にくらべて買手の情報が常にすくない情報の非対称性という問題から起こる現象ですが、この作者は、本当のことを知りたくても、なかなか知ることのできない買手のフラストレーションを、少しコミカルに転化して、うまく作品に仕上げています。

「経営学 興味増大 夢膨大」

大岩美結（啓明学館高校）

講評 経営学と聞いて難しそうだとか、お金儲けの話なんてなんだかね、という人もいますが、

中には、大人の世界の仕組み、経済やお金の動きを知りたい、という探究心、知的興味に溢れたひともいます。「夢」という言葉から、作者は興味だけではなく、チャレンジもしてみたいという思いもおありなのかな、と頼もしくなります。増大と膨大で韻を踏む技巧も効いています。

「離島から 何とか通った 三年間」

石橋実子（半田商業高校）

講評 雨の日も、風の日も、3年間よく頑張りましたね。作品から伝わってくる根気と努力を大いに評価したいと思います。でもこの作品は、それだけではなく、次第に日本から失われつつある、日本の原風景ともいえるべき、ふるさと、地域をもテーマにしている、ととれます。そこで生まれ育った貴重な体験を、これから、どこに行っても大切にしたいと思えます。

「まだ早い 児童が老後の 話する」

江崎由夏（各務原高校）

講評 小さい子供は大人になったら何々になりたいという夢を抱くもの。ところが、夢を語らず、いきなり老後を語ってしまう頭でっかちなこどものおかしさがよまれています。でも、それと同時に心配も伝わってきます。こんなに夢のない子供で将来大丈夫なのか、と。さらにこの句の面白いところは、劇中劇ともいうべき構造、つまりまだ早いよ、と自分より幼いこどもの心配をしてはいるものの、それが大人から見ればまだ子供の高校生である点です。

おかしさと心配、そして劇中劇、おもしろい作品でした。

「ボランティア 自分も他人も いい気持ち」

石川智実（東浦高校）

講評 ボランティアもふくめ、仕事は何のためにするのか、を考えさせられました。お金を稼ぐため、人生の目的を実現するため、いろいろあるでしょう。しかし、やはり仕事というものは、他人の満足があってこそ、自分の満足があるのかな、と改めて気づかせてくれる作品でした。

「文化祭 ししゅうひと針 気持ち込め」

竹下明里（啓明学館高校）

講評 文化祭の準備をしているのでしょうか。忙しい様子が伝わってきます。でも、やらされているという感じはなく、文化祭を盛り上げようとする若い熱意が伝わってくる作品です。

文化祭の成功もこうした一人一人の声なき熱い思いに支えられているのでしょうか。高校生活の一コマ、何かに一生懸命になった経験は色あせることなく、ずっと心に残ってゆくでしょう。

「冬休み そう思える日 いつくるか」

東谷朱華（星城高校）

講評 師走の忙しい時。学校は休みに入っても、宿題、行事、部活、そして家の仕事などに追われ、なかなか落ち着いて休む気持ちになれない様子がうたわれています。でも、作者はその気持ちをこうして川柳にこめて、うたっているじゃないですか。忙中閑あり、われわれは忙しさからは逃れられない、としても、その中であって、川柳を詠むような心の余裕は失いたくないものです。

「不登校 いじめだけでは ないのです」

伊藤陸人（知多翔洋高校）

講評 これは、学校教育に対する問題提起でもあります。学校が楽しくないというのは、本人にとっても、周囲にとっても大変不幸なことです。そんなとき、話を心から聞いてくれる人と話をすることで状況が変わることだってあります。学生、生徒は心を開いて相談出来る人を見出して欲しい、同時に教育者は **SOS** を受け止められる存在でありたい、そんな思いを改めて持ちました。

「ダメな子だ 言われ続けて 自信失せ」

田中志歩（各務原高校）

講評 人は否定され続ければ、次第に自分でもそう思い込んでゆくものです。逆に小さくとも成功体験を積み重ねてゆけば、たとえ最初はうまくいかなくても、だんだん自信がつき、やがてできるようになるでしょう。教育者は、時に厳しくすることがあっても、自信の芽を摘んでしまうようなことだけは避けねばならない、そう考えさせられました。

「消費税 ついに 5 円が 懐かしい」

奥川沙夜（武豊高校）

講評 日本に消費税が導入されたのは 1989 年、今から 27 年前、税率は 3% でした。その後、97 年には 5% になりましたが、それから 2014 年に 8% になるまでの、17 年間は 5% のままでした。「ついに」ということばには、現行の 8% どころか、今度は 10% だ、という意味も含まれているのでしょうか。「懐かしい」というところで、5% 時代が二度とやってこない遠い昔に思える気持ちが伝わってきます。昔を懐かしむ情緒的な気持ちと、消費税が段階的に引き上げられることへの残念感という経済感覚をブレンドしたユニークな作品です。なお、パーセントではなく、円という言葉を使う技巧もうまいですね。

2016 年第 1 回（2016 年 10 月）

（大賞）

「筋肉は ロボットよりも 神秘的」

近藤玲美捺（清林館高校）

講評 私たちは生物の授業で人間の身体の仕組みについて勉強し、生命がその長い進化の過程で獲得した成果に驚嘆したものです。しかし、それは生命の神秘のほんの一部に過ぎないものです。1912 年にノーベル生理学・医学賞を受賞した A.カレルは「物理や化学は長足の進歩を遂げたが、人間は人間自身を知らなさすぎる」と言っています。これは 100 年以上を経た今でも基本的には変わっていないように思えます。今後も科学はますます進歩を遂げ、ロボットも人間に近づくことでしょう。それでも人間が神秘の存在である点は、永遠に変わらないのかも知れません。

(傑作賞)

「凜とする 一步踏み入る 茶道室」

渡邊佳祐 (星城高校)

講評 茶道とは飲茶による接客行為ですが、定式化された一連の動作の中に、美学、哲学、教養など高度に精神的な要素も取り入れつつ、亭主と客が協働して「演じる」芸術ともいえます。その意味で茶室は重要な「舞台」でもあります。この句の作者は、その舞台でもある茶室に一步足を踏み入れるだけで、これから起きるであろう非日常的で、清々しい緊張感を予感しているのかもしれませんが。

2016年第2回 (2017年1月)

(大賞)

「学校は 未来の扉を 探す旅」

梶浦美侑 (津島北高校)

講評 扉という言葉と旅という言葉を象徴的に使ったうまい一句です。多くの甲乙つけ難い優れた作品の中から、本学のテーマである「夢実現大学」に一致するということで、この作品を大賞に選定いたしました。

目的地に着くことが人生なのではない、旅路が人生なのだ、と哲学者エマーソンは言っています。人生の旅が始まったばかりの若者には、はるかに続く道程、未来があります。私には未来がある。そう思うだけで、夢や希望が湧き、悩み、悲しみを吹き飛ばすことができます。まさに若さの特権ですね。夢と希望を持って、未来の扉を開け、進んで下さい。

(傑作賞)

「心の傷も 一緒に治す 療法士」

吉田倫梨 (津島北高校)

講評 人間の身体は目に見える肉体、目に見えない心が一体になってできています。怪我や病気をすると心まで弱くなります。そんな時、治療にあたって下さる方々の心遣いや励ましの言葉、普段なら何とも思わないようなことに、まるで暗黒の中で光を見るように、患者は勇気付けられ、癒されます。そんな思いを持っている人が療法士を目指しているならば、とても心強いことです。

「筆もてば 七色おどる 美術室」

本田美穂 (三重県立相可高校)

講評「七色おどる」という言葉に作者の絵に対する純粋な情熱が伝わってきます。そして美術室という一言だけで、絵の具で汚れ、道具が散乱したテーブル、白いギリシャ彫刻像がある部屋、その中、一心不乱に絵筆を持ってキャンバスに向き合う作者・・・そんな情景まで見えてくる作品です。

「学校は 強い絆の 生産地」

服部恵仁 (津島北高校)

講評 学校が好きな前向きな気持ち、そして絆という人間の感情を経済学でいうところの生産物にたとえるユニークなセンスを評価しました。学校生活の具体的な内容は何も描かれていないのに、学校というひとことで仲間と他愛もない会話に興じる高校生の日常風景の1コマすら浮かんできます。同じ地域、同じ年頃の仲間、大人になって時間が経つほど、実はそれが得がたい貴重なものだと気づく、まさに絆ですね。

「五限目は 視界遮る 頭なし」

久松瑛恋 (常滑高校)

講評 教師から見れば、一抹の残念さもある内容ですが、反面、かつて学生だった昔を思い出すと仕方がないかなと、思わず苦笑してしまう内容です。そんな内容を教室の中の風景として詠むおかしさを評価しました。もちろん、教師としては、5時間目も頑張っただけで勉強して欲しいという気持ちはあるのですが。

「弟よ ペンをリンゴに 刺すんじゃない」

吉田 佳吾 (揖斐高校)

講評 大人から子供まであの動画に癒しを求めるほど不安が高まっている世相でもあるわけですが、それが日本のみならず言葉や文化の違う世界の人たちまで同じような思いを持っていたのか、と驚かされました。さて、この作品からでは年齢はわかりませんが、無邪気な弟さんの悪戯、それを弟よ、と優しく諭す兄、仲の良い兄弟の様子が伝わってくる、ほのぼのとした作品になっています。

「勝って泣き 負けてドラマの 甲子園」

藤崎智也 (松坂商業高校)

講評 勝ち、負け、泣く・・・短い単語をうまく使い、球児たちが演じるドラマに球場、いや日本中が熱気に包まれるシーンが表現された技巧的な作品です。若者がゲームやスマホにばかり夢中になって内向きになり勝ちな昨今、大人にとっては今の若者にもそんな純粋で熱い思いが連綿と引き継がれていることに、どこかで少し安心感も感じさせる、そんな作品でもあります。

「忘れ物 とりに来たけど なんだっけ」

山本 怜奈（松坂商業高校）

講評 誰にでもある日常のコミカルな経験をテーマにした作品です。簡潔な口語の表現も光っています。補足ですが、心理学的には「入口効果」(doorway effect)というものがあるそうです。つまり、人は部屋の入口を通過することで、脳が「さあ、何か新しいことを始めよう」とばかり深層心理レベルでリセットされてしまい、部屋に入る直前まで保持していた目的や記憶を消してしまう傾向があるのだそうです。

「長良川 想いをのせて 継ぐバトン」

館 さくら（三重県立立相可高校）

講評 川べりでリレーの練習に励む女子高生の姿が浮かんできます。「想い」という言葉が風景に溶け込んで情感溢れる作品になっています。同時に「バトン」という言葉に表現される走者たちの若い躍動感も伝わってきます。高校生活の瞬間をスナップショットで捉えながらも、そこに静と動の要素を織り込んだ秀逸な作品になっています。

「放課後の 夕日に映える かげぼうし」

菌部 桃（三重県立相可高校）

講評 高校生活もあとわずかとなった3年生の秋、ふと我にかえり時の流れの早さを感じる放課後の夕暮れ・・・現実でありながら心象風景のようなイメージを持つ作品です。もう半世紀以上も前の歌謡曲ですが「赤い夕陽が 校舎をそめて・・・ぼくら離ればなれになろうとも、クラス仲間はいつまでも」というフレーズを思い出しました。卒業しても、この句に込めた思いはずっと残ってゆくことでしょう。

「こ・き・く・くる 伸びをしながら暗記をす」

松田詩野歩（豊橋西高校）

講評 文法の暗記、という無味乾燥になり勝ちな作業を川柳にしてしまう、高校生らしい発想の柔軟さ、そして技巧レベルの高さを評価しました。

田辺須野という現代歌人が「こきくくるくれこよと釣瓶落とし」という句を詠んでいます。これは「来る」という語のカ行変格活用を象徴的に用いて、時の流れの早さを「釣瓶落とし」にかけて詠んだ面白い作品です。

一方、この作品は、全く違う主題でありながら、カ変活用を使うという斬新さにおいて共通するものがあります。ただ、田辺の作品と違い、カ変活用の後半部分「くれ、こよ」が唐突に省かれており、そのかわりに「伸びをしながら・・・」と持ってくることで、暗記に疲れた高校生が勉強を中座し、思わず伸びをする、そんな気持ちがうまく表現された、なかなか技巧的な作品となっています。

2017年 第1回

(大賞)

「母の縫う これが最後の 背番号」

矢野順也（三重県立相可高校）

講評 ストレートでわかりやすい句です。まだ高校1年生なので中学時代を思い出して作った作品でしょうか。「これが最後」という言葉で、クラブ活動の最後になって、楽しいこと辛いこと、いろいろな思い出を回顧する作者の様子が伝わります。頑張ってきたけど、それは自分だけではなくお母さんが陰からサポートしてくれていたから続けられたという思い、口には出さないけれど感謝している作者の気持ちが伝わってきます。

「休み時間 小泉八雲と 夏の雲」

北村郁佳（三重県立相可高校）

講評 雲という言葉が掛言葉になっていますが、内容的にも小泉八雲の「夏の日の夢」というエッセイとも絡めているのかも知れません。この作品は浦島太郎の民話を自分の少年時代の記憶と絡めたような不思議な話で、随所に雲がテーマとして描かれています。小泉八雲は玉手箱を開けると紫色の雲に包まれ時間があつという間に過ぎ去り老人になるという物語を妻の節（せつ）からきいてとても気に入っていたそうです。この作品もほんの束の間、ぼんやり見ている夏の雲が、心象風景のようにいつまでも心に残るような、そんな不思議な魅力を感じます。

「墨の香に 初心に戻る 古（こ）の習ひ」

伊藤里桜（三重県立相可高校）

講評 書道の授業の時の気持ちを詠んだ作品でしょうか。墨の香（か）、古（こ）の習い、といった言葉の使い方が成熟した国語力の高さとセンスの良さが光る作品です。書道の「道」（どう）は道（みち）と書きますが、こうした言葉は他にもあります。茶道、柔道、剣道など。いずれも目に見えない精神を重んじ、その修養を心がけるところに特徴があります。初心に戻るといふ気持ちは学ぶもの、道を極めようとする者にとって忘れてはならない気持ちですね。

「蝉の声 途切れる一瞬 的中矢」

北村郁佳（三重県立相可高校）

講評 弓の練習のようすがまるで目の前で見ているように伝わってきます。夏の熱い日、流れる汗、ずっと響いている蝉の鳴き声。そんな中、心を集中させ、矢を射る瞬間、それがふと消える様子が伝わってきます。緊迫した静と動のコントラスト、一瞬に込められた時間が持つ意味、それらが詠み込まれた秀逸な作品です。

「あいさつが 終わって走る バス停へ」

阿久根奈海 (三重県立相可高校)

講評 一本逃すとなかなか来ないバス。その時間が刻々と迫る、そのことで頭がいっぱい……。それなのに、授業が長引いて下校時刻がいつもより遅れてしまい、その後にクラスの終業の挨拶をしているのでしょうか、それとも帰り道でだれかに偶然会って挨拶しているのでしょうか……。バスに遅れまい、その一心で脱兎のごとく走り出すコミカルな様子を詠んだ川柳らしい作品です。

「雲をぬけ 空に広がる ちぐさ色」

大久保綾人 (揖斐高校) 1

講評 雲とちぐさ色の空のコントラストが見えるような一句です。ちぐさ色とは灰色がかかった水色のことで、古くなった衣を藍で染め直した色とされます。その昔、江戸の染物にかんする書物に「京都ではその色をちぐさ色という」という記述があり、もともとは関西の言葉のようです。高校1年生でこの言葉を作品に使う日本語力の高さを評価しました。

「せんぷうき 三台あるのに あたらない」

小川珠里 (揖斐高校)

講評 夏の暑さを扇風機という小道具をうまく使い、だれもが思い当たるシチュエーションの面白さを詠んだ作品です。扇風機も1台ではなく、3台というところに川柳らしさが出ています。3台もあるのだから大半のエリアはカバーされるはずなのに、たまたま死角のようなところできて、そこに座っている、だけど教室は座席指定だから移動できない、そんなもどかしさがおかしさとして伝わってきます。シンプルに見えて、とてもよくできた作品です。

「演劇部 舞台の上では ちがう人」

岩崎美優（揖斐高校）

講評 演劇では俳優が台本に合わせて別の人格を演じます。誇張しつつも、声、表情、身振り、手振りを通して台本の文字では描けない何かを観客に伝えます。演技のはずなのに、そこに人間の本当の姿、おかしさ、悲しさが表現されます。だからこそ、観客は感動し、魅了されるのでしょうか。この作者も演劇で普段の自分とは違うキャラクターを演じることで、隠れていた別の自分に出会う楽しさを見出したのでしょうか。

「ディクトル その背中には パスの文字」

真野輝一（星城高校）

講評 ディクトルとは古代ローマの時代からある言葉で独裁者という意味で使われます。ローマ以降の世界史でも多くの独裁者が現れますが、多くの場合、その末路は哀れなものでした。20世紀のヒトラーも例外ではありません。チャップリンは「独裁者」という映画でナチス政権、ヒトラーを批判します。映画の最後の演説シーンで次のような一節が出てきます。「憎しみは消え去り(pass)、独裁者ら(dictators)は死に、彼らが人々から奪い取った権力は、人々のもとに返されるだろう」原文ではこの短いフレーズの中に「ディクトル」と「パス」という単語が使われているのです。この映画はナチスが猛威をふるっていたさなかに作られました。そんな時代にこうした映画を作ったことは大きな意味があったのです。作者の真意はともかく、この川柳が人類の歴史上の大きなテーマを扱っているという解釈に立つならば、この作品を入選させないわけにはいかない、審査ではそのような結論となりました。

「町工場 大きな夢で ものつくる」

野田将吾（愛知黎明高校）

講評 小さな町工場と大きな夢、その対比がうまいですね。ソニー、ホンダ、京セラなど、今は日本を代表するような大企業も始まりは小さな町工場だったといいます。中部経済圏は日本のものづくりのメッカと言っても良い地域ですから、実際に資金も設備もない状況で懸命に試行錯誤を重ね、新たな技術や製品の開発に挑む中小企業も少なからず存在することでしょう。今後、いろいろな仕事がAIに置き換わってしまうのではないかとされる昨今ですが、若者が気概を持って、ものづくりにチャレンジする気持ちだけは失って欲しくない、そんな思いから選考させていただきました。

「もう大人 都合悪いと まだ子ども」

堤莉南子（東海商業高校）

講評 親の言うこと、先生の言うことを聞きなさい、ずっとそう言われて育ってきたのに、もう大人なんだからそれくらい自分で考えなさい、自覚を持ちなさい、などと言われる。それで自分なりに考えて意見を言う、大人のファッションを試してみる、すると今度は、まだ子どもなんだから、などと言われてしまう。こんな経験はきっとだれもがあることでしょう。大人と子どもの境目にいるような高校生の作者の気持ちをコミカルに描きながらも、大人としては考えさせられる部分もある、なかなかリアリティもある作品になっています。